# 25［評論］『芸術人類学』

　新しい人類が出現するまで、自然界にはこういうことはおこりませんでした。自然の中の生き物たちは、長い進化の過程をつうじて、しだいしだいに脳を発達させてきました。〈　Ａ　〉どこまでも環境世界と自分の生命活動ができるだけ合致できているような、適応行動ができるようなかたちで脳の構造を進化させてきました。そうでなければ、地球上に生き残ることはできなかったはずです。動物ばかりではなく、あらゆる生命には「心」があります。〈　Ｂ　〉その「心」は現実世界の構造と、何らかのレヴェルで重なり合うような働きをしています。つまり動物などの行動を見ているとわかりますように、私たちがおこないがちな不自然な行動だとか、妄想に突き動かされた行動などをしません。一見不自然な行動をしているように見えるときでも、大きなａシテンに立ってみると、ちゃんと現実世界のｂインガの法則にしたがっているのがわかります。①鳥の心に妄想はないのです。人類以外の生物は妄想をいだかない、ということができるでしょう。

　〈　Ｃ　〉妄想とは何かというと、心の内面で考えたことと外界の現実が、対応関係を見出せない状態のことを言います。頭の中に発生するイメージや思考がｃカジョウになってしまって、その対応物を外の世界に見出せなくなってしまった状態です。その結果、外の現実世界ではぜったいにおきないこと、おこりえないだろうと思われることが、脳の中ではおこるようになります。私たちには②こういうことはよくおこりがちですが、鳥や動物ではおこらないのです。〈　Ｄ　〉彼らは進化の過程で、自分たちの感覚器官がとらえている外の世界にある現実と自分の心の中におこっている動きを、できるだけ同じ型に合わせようとしています。その合わせ方は、生物ごとにみんなちがっています。〈　Ｅ　〉現実と心の動きを対応させる「射影」関係は、無数に変化していくことができますが、③それらの間にはちゃんとしたつながりがあって、どれもなんらかのやり方で、現実世界の構造をなぞっています。そこでたとえば、ミミズの世界という小さい限定をおこなって、その世界の中でまちがいなく生きてこられたわけです。

　ところが私たちの直接の先祖である人類の心では、ほかの動物にはおこらなかったｄバクハツ的なｅジタイがおこって、大脳の構造に根本的な変化が生じて、多元的に結合したニューロンの通路をとおして、流動的な「心」が［　　　　　］な自由な運動をはじめるようになってしまったんですね。そうなりますと、外の世界におこっている現実とヒトの心の内面世界とがまっとうな対応関係をもたないでも、私たちはこの心の内面生活というものをもつことができるようになります。

●語注

「射影」関係＝うつった影のような関係。

ニューロン＝神経組織の構成単位となるもの。

問１　二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　空欄Ａ〜Ｅの内、二箇所に「しかし」が入る。その箇所を記号で答えよ。4点×2

〔　　　〕〔　　　〕

問３　傍線部①の理由を第１段落の言葉を用いて、次の文に続くように二五字以内で答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

はできなかったから。

問４　傍線部②においてどのようなことがよくおこるというのか。その内容を三〇字以内で抜き出せ。6点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部③の指示内容を本文中から抜き出せ。6点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　［　］に入る最も適当な四字熟語を次から選べ。6点

ア　一所懸命　　イ　用意周到　　ウ　縦横無尽　　エ　一心不乱　　オ　本末転倒

〔　　　〕

問７　本文の内容と合致するものを一つ選べ。6点

ア　人類と他の動物との一番大きな相違点は、妄想をもつことができるかどうかという点である。

イ　ミミズは、小さい世界に限定することで、妄想をもってもその世界で生きてゆくことができる。

ウ　現実世界と心とがまっとうな対応関係をもつことで、人類は安心して生きてゆくことができる。

エ　動物は妄想をもたないので、どのような場面においても不自然に見える行動をとることはない。

オ　外の世界の現実と心の内面世界とが対応関係をもたないでも、人類は生きてゆくことができる。

〔　　　〕

【解答】

問１　ａ視点　ｂ因果　ｃ過剰　ｄ爆発　ｅ事態

問２　Ａ・Ｂ

問３　環境世界と自分の生命活動が合致しないと生き残ること（はできなかったから。）（25字）

　　（傍線部の内容がなければ、それぞれ４点減点）

問４　心の内面で考えたことと外界の現実が、対応関係を見出せない状態（30字）

問５　現実と心の動き

問６　ウ

問７　オ

■覚えておきたい語句

□6　　妄想……………………根拠のない主観的な印象や信念。

□7　　突き動かす……………刺激を与えて、その気にさせる。

□8　　因果……………………物事の原因と結果。

□18　　なぞる…………………そっくりまねる。

□21　　多元的…………………物事の根源が多くあること。

□23　　まっとうな……………きちんとした。ちゃんとした。

□問６　 用意周到………………用意が十分に行き届いて、手抜かりないこと。

□問６　 縦横無尽………………思う存分にすること。自由自在。

□問６　 一心不乱………………一つのことに心を集中して他の事を考えないこと。

□問６　 本末転倒………………大事なこととそうでないことを取り違えること。

〔要　約〕

各段落とも、「人類」と「それ以外の動物」を対比させながら、同じことを重点の置き方を変えて説明している。よって、「人類以外の動物は〜。それに対して、人類は〜。」と対比させてまとめる。

↓

人類以外の動物は、環境世界に自分の生命活動が適応できるように脳を発達させてきた。それに対して、人類は現実世界と内面世界の対応関係をもたなくても、つまり妄想をいだいても生きていけるのである。（94字）

〈筆者＆出典〉中沢新一（なかざわ・しんいち）一九五〇年（昭和25）山梨県生まれ。思想家、宗教学者、人類学者。明治大学野生の科学研究所所長。『森のバロック』で読売文学賞、『対称人類学』『カイエ・ソバージュ』で小林秀雄賞、『チベットのモーツァルト』でサントリー学芸賞受賞。ほかに、『アースバイダー』などがある。本文は、『芸術人類学』（みすず書房、二〇〇五年）より。

【読みのセオリー】

★指示語の内容をつかむ

（１）まず、直前の部分を探してみるのが原則である。

（２）ただし、「こういう」「そういう」といった指示語は、「まとめ」の指示語で直前の内容を大きく受けて要約していることが多い。

■読みのセオリー［実践］指示語の内容をつかむ

問４　「私たちには②こういうことはよくおこりがちです」

　　　が、↓↑

［１　　　　］や

［２　　　　］ではおこらないのです。

　　　↓

私たち（＝人類）にはおこり、

［１　　　　］や

［２　　　　］にはおこらないこととは何か。

　　　　＝

1　人類以外の生物は

［３　　　　］をいだかない。

　字数制限と対応させながら、直前からに［３　　　　］対応した箇所を探そう。

（同じ番号の空欄には同じ語が入る。）

〔解答〕

１鳥　２動物　３妄想

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問４　１行目「こういうこと」とはどのようなことか、その説明として最適な部分を本文中より三〇字以内で抜き出せ。

　［答］　心の内面で考えたことと外界の現実が、対応関係を見出せない状態（30字）

＊新問

問８　空欄に入る適語を漢字二字で答えよ。（３行目「適応」を空欄に）

　［答］　適応